

「軒下のある暮らし」を見直そう

開放的で居心地のいい空間

軒下での雨宿りもいまは昔。

いま、雨宿りができるような軒先のある家は少なくなってきたという。現代の暮らしに合った、さまざまなかたちの軒下空間を提案する

建築家の山中祐一郎さんに話を聞いた。

建築家・デザイナー

山中祐一郎

●やまなか・ゆういちろう 1972年栃木県生まれ。有限会社S.O.Y.建築環境研究所代表。建築設計のほか、ランドスケープ、インテリア、プロダクト、グラフィック、アプリ開発などの幅広いデザイン活動を展開している。

屋内でも屋外でもない接続空間

——「軒下のある暮らし」を提案するようになった経緯を教えてください。

二〇〇七年に、国内のリゾートホテルの設計の依頼をいただいたことがきっかけです。リゾートホテルにとって、人が心地よいと感じる構成

要素を探るために、インドネシアのバリ島やスリランカを訪れて調査しました。

調査に訪れたリゾートホテルでは、ロビーやレストランのテラスなど、気持ちのいい場所はみんな軒下だった。風通しのいい日陰で、くつろいだ雰囲気でおしゃべりしたり、新聞や本を読んだり。思い思いの時間を過ごす人々の姿が印象的でした。

私は栃木県出身で、父の実家は農家だったこともあり、農機具を置いたり、作業を行なう半分吹きさらしの納屋がありました。子供のころは大人に混じって、ときには大人の邪魔をしていたかもしれないですが、仕事を手伝ったり、遊んだりしていたものです。

大きな軒下を持つ作業場や、玄関の広い三和土^{たたく}、縁側などは、近所の

人がちよっと立ち寄ってお茶を飲んだり、世間話をする「外とつながる場所」でした。

それと同時に、風の心地よさや季節の変化を感じられる、部屋の中とも屋外とも違う「ちよっどいい心地よさ」を体感できるスペースでもあった。屋内から屋外へつながる軒下や回廊、テラスなどを「接続空間」と呼んでいます。この居心地のいい、ほどよくゆるやかな空間を、商業施設や住宅を設計するうえで取り入れたいと、ハウスメーカーのプランとして提案したり、注文住宅を設計する際に施主へ相談しています。

消えつつある軒下を復活させる

——縁側や軒下は、あまり見かけなくなつたように思います。

確かに和風建築のニーズが減って、

洋間だけの家も珍しくありません。縁側で干し柿を吊るしたり、軒下で作業するような場面もあまり見られなくなりました。しかし、それ以外にも理由はあります。

一つは建築基準法上の面積の考え方です。敷地面積に対する建築面積の割合を建ぺい率といいます。建物が小さくても屋根が大きければ、その投影面積で建ぺい率は計算されます。屋根から外壁が一メートル以内であれば、加算されないという緩和措置はありますが、都市部のように敷地面積を大きくとれない場所では、屋内の面積を狭くしてまで軒下をつくらうという人はなかなかいません。幅一メートルの軒下では、腰を下ろしてゆつくりしようとは思えないし、雨宿りさえ難しいでしょう。もう一つはエアコンの普及です。建物の気密性や断熱性が高まり、コ

ントロールされた空調の室内で、窓を開ける習慣がなくなつた。日本が暑くなりすぎたのもあるかもしれませんが。昔だったら扇風機やうちわでしのげた暑さも、最近では熱中症で命を落とす危険も出てくるほどです。この二つの理由で日本の軒下は絶滅の危機に瀕していると考えています。たかが軒下と思われるかもしれませんが、このような半屋外のスペースが担っていた役割を考えると、日本の生活文化の重要な要素が失われつつあるといえるのではないのでしょうか。

——軒下はもう必要とされていないのでしょうか？

必ずしもそうとはいえないと思います。私は「軒下研究会」というのを一人で立ち上げて、面白い軒下を見つけたら、従来の軒下に代わる新しい軒下的な空間——半分屋外の心